

『千のプラトー』における「歴史」哲学

吉澤 保

ドゥルーズとガタリは、ニーチェを援用しつつ、歴史を生成〔devenir〕に對比させている。「ニーチェは、歴史を、永遠的なものではなく、歴史以下のものに、或いは歴史以上のものに、つまり〈反時代的なもの〉に、対立させている。〈反時代的なもの〉とは、此性、生成、生成の純粹無垢、をあらわす別名である（記憶に対しては忘却、歴史に対しては地理、模写に対しては地図、樹木状組織に対してはリゾーム）¹」。歴史は、定住民、マジョリティに、生成は、ノマド、マイノリティに、帰せられている²。『千のプラトー』ではそれぞれのプラトー（章にあたる）のタイトルに年代が入れられていて、一見単なる歴史記述がなされているかのように見えるが、そうではない。ノマドやマイノリティの埋もれた歴史を発掘しようなどと主張されているわけでもない。では一体この著作で行われていることは何だろうか。「人は歴史を書く。しかし常にそれを定住民の視点から、そして国家という統一的装置の名において、書いてきた。最もあり得ない場合〔限りなくゼロに近い場合〕、つまりノマドについて語った時でさえも、そうであった。欠けているのは、〈ノマドロジー〉、歴史の反対、である³」。この試みは、歴史の反対ということから発想されて、地理とも形容されている⁴。ここでは、一般的用法ではないノマドロジーや地理ではなく、歴史哲学という表現を用いるが、これはドゥルーズとガタリの試みを一般的地平で考察するために他ならない。二人の歴史哲学が、歴史の基礎づけを目指すそれではないのは予想されよう。カントが理性に関して行ったような意味での歴史批判でさえもないだろう。ここでいう歴史哲学の歴史は、括弧付きの歴史であり、まさに歴史そのものの価値が問われている。戦争機械を扱う第12プラトーと、国家装置を扱う第13プラトーとに焦点を絞り、『千のプラトー』の「歴史」哲学について考察する。こ

の覚書は、この「歴史」哲学全体の、ひいてはドゥルーズの哲学の、評価に向けた予備作業に他ならない。

生成の共存

『千のプラトー』によれば、四つの記号の体制がある。1) シニフィアンの体制 (国家装置)、2) プレ・シニフィアンの体制 (原始社会)、3) 逆シニフィアンの体制 (戦争機械)、4) ポスト・シニフィアンの体制 (主体化)⁵。五つの社会的形成体がある。1) 原始社会、2) 国家社会、3) 都市社会、4) ノマド的社会、5) 全世界的組織⁶。国家には二つの極がある。1) 魔術師、2) 法律家⁷。また国家には三つの形式 (形相) [forme] がある。1) 古代帝国国家、2) 進化した帝国、3) 近代国民国家⁸。特に、資本主義を前提にする近代国民国家には三つの二極性がある。1) 中心の二極 (社会民主主義国家と全体主義国家)、2) 中心の二極 (西と東、つまり、資本主義国家と官僚主義的社会主义国家)、3) 中心と周辺という二極 (北と南)⁹。

観念を経験的に獲得されたものと見なす経験論者は、魂のタブラ・ラサを想定する際、これらの獲得された観念を魂からすべて奪い取る。現象学的還元を先取りするようなこの言わば経験論的還元を、近代自然法学派は社会的コンテキストで行う。人が集合レベルで設立するもの一殊に国家—が未だ誕生していない状態を自然状態として、そこから出発して歴史を記述している。例えば、ルソーによれば、自然状態とは国家も社会も言語さえも未だない状態であり、人は分散して森の中をさまよっている。このような人々が社会状態へと移行する。『千のプラトー』では、歴史は、ルソーの場合とは異なり、個人から出発して説き起こされていない。この著作では、歴史は個人からではなく社会から出発するが、この点にはもっと注意を要する。個は群れの中でしか存在できないというような有機物一般にも妥当する生物学的前提が問題になっているわけではない。ドゥルーズとガタリは、通常の意味での社会ではなくアジャンスマン [agencement] という概念を構築している。アジャンスマンは表現と内容とに分けられ、内容の方のアジャンスマンは、機械状 [machinique] と形容されている¹⁰。アジャンスマンそのものが機械であり、この場合、通常の意味での機械とは異なる。通常の意味での機械は、『千のプラトー』では特に技術的機械と呼ばれている¹¹。機械状と形容されるのは一つには、アジャンスマンという機械の中で人間はその部品でしかないからである。メインは人間ではない。しかしアジャンスマンを単なる人間の集合体と考えると間違ふことになる。アジャンスマンには人だけではなく、

動物も道具(技術的機械)も含まれている¹²。通常社会とされているものの中で機能している要素すべてがアジャンスマンの構成要素である。人間は特権化されていない。また、アジャンスマンは、生産様式と完全に無関係ではないが、生産様式ではない¹³。マルクス主義では、生産様式こそが社会体制を分類する際の基本的概念となっている。更に、アジャンスマンは、存立平面、地層、抽象機械とともに、『千のプラトール』の哲学の骨格を規定する諸概念を構成している。この点は後で取り上げる。

歴史はこのようにアジャンスマンを単位にして成立している。さて、アジャンスマンは一見時間軸上で継起しているように見える。或いは進化しているように見える。例えば、捕獲装置としての国家を論証するのに、『千のプラトール』は、原始社会から国家装置への移行を詳述している。交換のアジャンスマンたる原始社会は、ストックのアジャンスマンたる国家装置に対して、先取りしつつ祓いのけるというパラドクサルな関係をもっている。原始社会は、限界(ペニユルティエーム)内に留まる限り、国家装置に移行することはない。閾(最終)を飛び越えることで国家装置に移行する¹⁴。あたかも原始社会から国家装置が生まれたかのように見える。また、国家は、捕獲を事とする魔術師という極から、条約を行う法律家という極へ進化したかのように見える¹⁵。更に、国家は、古代帝国国家(〈原国家〉)から、進化した帝国やポリスなどに、更に近代国民国家に、進化したかのように見える¹⁶。最後に、近代国民国家が、中心の二極(同形性)から、東西の二極(異形性)へ、そして、南北の二極(多形性)へと拡大したかのように見えることも付け加えることができる¹⁷。

近代自然法学派は、自然状態から出発して国家の形成を説明しようとしている。ヘーゲルによれば、歴史は弁証法的に展開する。マルクスは、ヘーゲルの、歴史の主体としての理念を、物質に置き換えるが、歴史のそれぞれの契機が弁証法的に継起するという点で違いはない。自然から文化へという典型的な思考はいずれも同じ発想にたっている。発展段階の数と、段階間の移行の質(連続的か不連続的か)とがどのようなものであれ、始まりと終わりがあり、一方向的であり、そこには暗黙であれ歴史の目的が潜んでいる。

一見『千のプラトール』も以上の考えに従っているように見える。アジャンスマンは相互に還元不可能である。後続するものが先行するものから不連続的に生まれたかのように見える。しかしながら、ドゥルーズとガタリはこのような意味での進化論者ではない¹⁸。彼らは、アジャンスマンは、時間的に継起しているのではなく、共存していると考えている。原始社会が存在する

時には既に国家は存在する¹⁹。国家の出現時に既に資本主義はある²⁰。資本主義が誕生してからもまだ原始社会は残存している²¹。また、国家の二つの極の間にも、古代帝国国家、進化した帝国、近代国民国家、という国家の三つの形式の間にも、近代国民国家における三つの二極性の間にも、歴史的発展段階があるわけではない²²。

歴史は共存である。正確には、「歴史は、諸生成の共存を継起に翻訳しているにすぎない²³」。これこそが、ドゥルーズとガタリの「歴史」哲学のテーゼのうちで最も重要なものである。このテーゼの理論的賭金は正しく見積もる必要がある。歴史には始まりも終わりもない。それどころではない。過去から未来へという方向性もない。理性的なものと実在的なものとを同一視する通俗的なヘーゲル主義におけるように、歴史が理念の自己展開としての進歩であるなら、我々にはバラ色の未来が待っている。一方、自然状態から社会状態への移行は墮落にすぎないと考えるルソーの場合、その反対になる。自然への回帰は不可能であるが、社会を評価する基準は自然が提供する。このように歴史は我々に我々の目的を教えてくれる。共存が本来的なら、目的はありえない。

政治或いは権力

近代国民国家は、国家装置が資本主義という公理系の実現モデルとなった産物である²⁴。ここから考えるに、資本主義は、少なくとも資本主義が必然的にもたらす社会的システムは、単に経済的なものであるだけではなく、政治的なものでもある。また、国家装置も地代、利益、税を捕獲する装置であるという点で、本来的に経済的なものであり、資本主義への傾斜をもたないわけではない²⁵。このような意味で、資本主義も含めてアジャンスマンはいずれも、政治的なものと言うことができる。言い換えれば権力である²⁶。歴史は、アジャンスマンの共存の継起的翻訳であった。歴史はそれ以外のものではなかった。アジャンスマンがいずれも政治或いは権力であるなら、歴史は政治或いは権力に還元される。重要なのは、『千のプラトール』の「歴史」哲学では、通常政治的とは見なされない領域までも、政治或いは権力に含まれるということだ。政治或いは権力に無縁なものは何もない。ドゥルーズとガタリによれば、国家装置は内部性という形式をもつが、国家装置同様アジャンスマンである戦争機械は、この国家装置に対して外部にある。両者のこの外部性という関係は、神話、叙事詩、演劇、ゲーム、集団、科学、芸術、哲学、思惟といった様々な領域に見いだされている。

例えば、科学は、王道科学（国家装置）とノマド的科学（戦争機械）とに二分されている。王道科学のモデルは、1) 固体、2) 安定したもの、永遠なもの、同一的なもの、恒常的なもの、3) 条理空間、4) 定理、である。それに対して、ノマド的科学のモデルは、1) 流体、2) 生成と異質性、3) 平滑空間、4) 問題、である²⁷。そして「戦争機械のノマド的科学と国家の王道科学、という二つの科学の、この対立或いはむしろこの極限-緊張は、様々な契機に、様々な水準で見出される²⁸」。この二つの科学に対応するそれぞれの技術者、労働、集団も存在していて、この対立は単に科学に留まらない。また、ドゥルーズとガタリは、フッサールが語る原幾何学を援用しつつ、「円 [cercle]」と「丸 [rond]」とを峻別している。「円は理想的にして有機的な固定した本質であるが、丸は、円と丸いもの（花瓶、車輪、太陽…）とから同時に区別される漠然とした滑らかな本質である²⁹」。そして「国家は理想的な円を生産しかつ再生産することをやめないが、丸を作るためには戦争機械が必要だ³⁰」。通常なら政治からは無関係とみなされるようなものにも、国家装置と戦争機械との対立が見いだされている。

素朴に考えるなら、我々の主体性は、政治或いは権力の影響を被らないプライベートな閉域である。しかしながら「イマージュ」に覆われている「思惟」こそは、政治或いは権力が直接の標的とする開かれた領域である。思惟のイマージュは決して同一のものというわけではなく、様々なものがあり、真理の帝国と、精神の共和国という極をもっている。前者は、「存在 [être]」の究極の根拠としての、或いは包括する地平としての〈全体 [Tout]〉であり、後者は、「存在を我々にとっての存在に変換する〈主体〉」である³¹。この極は、上述した国家装置の極（魔術師と法律家）に対応している。「[思惟の]イマージュに話を限れば、真理の帝国と、精神の共和国とが口にされる度ごとに、それは単なる暗喩ではないように思われる。それは、思惟を、[国家の]内部性の原理或いは形式として、地層として、構成する条件である³²」。しかし「思惟」そのものは本来的には決してこのようなものではない。それは、反思惟、外の思惟、ノマド的思惟、と呼ばれている³³。「思惟は余すところなく、生成、二重の生成であり、〈主体〉の属性と〈全体〉の表象ではない³⁴」。

通常、宗教は、近代における政教分離や信仰の自由からも分かるように、政治権力が介入してはならない私的な領域であると考えられている。しかしながら、『千のプラトー』の「歴史」哲学では、宗教さえも聖域とは認められない。「1227年—ノマドロジー叙説：戦争機械」の公理二・命題五を論証する節では、戦争機械がノマドの発明に帰せられ、国家の条理空間との対比におい

てノマドの平滑空間が示されている。ここで、ノマドの空間との比較において、宗教空間が考察されている。宗教は一つの場所に絶対を出現させる。ところで、国家装置の条理空間が相対的包括性とされるのに対して、戦争機械の平滑空間は局所的絶対性とされている³⁵。一見、宗教は、平滑空間にあるかのように見える。しかしながら、「宗教の絶対は本質的に、包括する地平であって、それが聖なる場所に出現するのは、包括的なものに堅固で安定した中心を定着させるためである³⁶」。つまり宗教は国家装置の一部品である³⁷。しかしドゥルーズとガタリはここで考察を終えない。宗教は本来、普遍性を求めるものであり、これは、国家装置のアジャンスマンと結びつき普遍的或いはスピリチュアルな国家を全世界に実現しようという傾向になる。しかしこの傾向には、全世界的組織とは本来的に異なるという国家装置の性質に反するものがあり、宗教を国家装置の外部へ突き進めることになる。つまり宗教は、単に国家装置の一部品であるだけではなく、戦争機械の要素でもある³⁸。科学であれ、思惟であれ、宗教であれ、決して政治或いは権力から保護された領域ではないことが分かる。

原国家としての国家はまず何ものも前提にせず、一挙に完成した姿で誕生した。既述したように、この古代帝国国家が、進化した帝国やポリスや封建制国家などへ、そして、近代国民国家へと「進化」する。古代帝国国家は、マンフォードの言うメガマシーンそのものであり、機械状隷属をもたらす。上位の審級の下で、その中にあるすべての要素が部品となっている³⁹。人はメガマシンの一部品にすぎない。国家は出現するや否や必ず、脱コード化された流れ〔flux〕も発生させずにはおかない。それは国家内部だけではなく外部でもそうである。東方で誕生した古代帝国国家のストックは、西方にも国家を群生させずにはおかない。このように新しく姿を表した国家こそが、進化した国家、ポリスである⁴⁰。この二番目の形式の国家（進化した帝国、ポリスなど）では、主体化が生ずる。素朴に考えるなら、主体化は、政治或いは権力が介入し得ない私的領域が形成されることである。しかしながら、この主体化はそもそも、古代帝国国家が生み出した絶対的な公共性という可能性から分泌したものに過ぎない。古代帝国国家は、土地、労働、貨幣をすべて所有する国家である（原始社会に交換は存在したが、貨幣を導入したのは国家に他ならない）。私的なものはまだ一切存在しない⁴¹。主体化はこの古代帝國的隷属を前提にして初めて可能となる。

また何よりも主体化とは服従にすぎない⁴²。『千のプラトー』では、隷属〔asservissement〕と服従〔assujettissement〕という一見相似た二つの概念が区別

されている。古代帝国では機械状隷属が、進化した帝国では社会的服従が、実現されることになる。服従は、国家という機械への隷属ではない。隷属の場合、人間は、上位の審級の支配下にある機械の一部である。服従は、主体が主体にとって外的な対象—技術的機械を含む—に服従することである。もちろんこの場合でも上位の審級は存続している⁴³。一見、主体性は、政治或いは権力を免れているかのように見えるが、決してそうではない。国家という条件の下でしか存在しえず、その意味で、国家という権力体の縮小版にすぎず、また、実際には服従でしかない。思惟を扱った箇所も考慮に合わせて考えるなら、どのような哲学者—デカルト、カント、ヘーゲル、フッサール—のものであれ、主体性は国家装置の産物にすぎない⁴⁴。

「資本はすべての人間を主体として構成する主体化の点として作用している⁴⁵」。近代国民国家は、資本主義という公理系の実現モデルであり、資本主義の効果によって、第二の形式の国家の場合よりも一層、主体化、即ち社会的服従、を実現させることになる。他方で、資本主義の公理系は機械状の隷属を再び実現することになる。国家装置の超越性(超コード化[surcodage])に対して、公理系は内在性によって特徴付けられる⁴⁶。このような違いにも関わらず、効果としてはいずれも機械状隷属を生み出すことになる。ただし古代帝国の機械状隷属がそのまま回帰するわけではない⁴⁷。

このように近代国民国家では、主体の服従と隷属がともに実現している。ドゥルーズとガタリの哲学では主体性はかくも貶められている。西洋近代において大々的に展開される、主体性に依拠する形でいかなる救済策も、ここでは意味をもたない。コスモポリタンのものであれ、ナショナリスト的なものであれ、類的完成はない。実存主義的な本質の獲得さえも無意味だ。

権力と流れ

政治或いは権力は我々の生の隅々にまで浸透している。しかしながら正しくは権力装置という種類だけが存在してきたわけではない。権力には、それに相関する流れが常にある⁴⁸。原始社会では流れはコード化されている。単なるコード化はまだ超コード化ではない。古代帝国国家は、原始社会において既にコード化されていた流れを、或いはコードそのものを、超コード化する⁴⁹。土地であれ、労働であれ、貨幣であれ、すべては国家装置に帰属する⁵⁰。『アンチ・オイディプス』風に言えば、すべては専制君主の身体上に登記される⁵¹。国家装置が行う超コード化は必ず、脱コード化された流れを生み出すことになる⁵²。古代帝国国家には公共的圏域しか存在しなかったが、進化した

帝国ではこの公共的圏域からこぼれ落ちる形で私的領域が徐々に拡大する。客観性しか存在しなかった世界に、主体性が少しずつ広がってゆく⁵³。資本主義は、脱コード化された流れを接合〔conjugaison〕する。コード化は、流れに対して言わば状況束縛的である。つまり個々のケースの具体性を捨象することができない。流れをこのような個別性から捨象するには、上位の審級に還元するしかない。これこそが超コード化である。このように超コード化は、超越的かつ間接的にしか流れに関わることができない。一方、資本主義の公理系は、流れに対して直接的に関わる。超コード化が超越であるのに対して、資本主義は内在である⁵⁴。接合は超コード化ではない。また、接合は、進化した帝国で行われる結合でもない。結合は局所的なものにすぎなかったのに対して、接合は一般的なものである⁵⁵。『アンチ・オイディプス』風言えば、すべては資本の身体上に登記される⁵⁶。

このように歴史は、権力と流れとの相関関係である。原始社会であれ、国家であれ、資本主義であれ、関わるのは流れである。これは言い換えれば、国家装置と戦争機械との相関関係でもある。『千のプラトーン』は、上述の四つのアジャンスマンのうち特にこの二つに焦点をあてながら、議論を展開している。すべては、国家装置と戦争機械との絡み合いにすぎない。四つのアジャンスマンが相互に還元されず、いずれも共存する以上、国家装置と戦争機械も同様である。既述したように、国家装置は内部性の形式をもち、戦争機械は国家装置の外部にある⁵⁷。

戦争機械はノマドが発明したものであった。戦争機械は政治的なものであり、それ自体紛れも無い権力装置である。戦争は国家を前提にするという通念に反して、ドゥルーズとガタリは、戦争を、国家装置の外部にある戦争機械に帰する。しかしながら二人によれば、戦争機械は戦争を必然的に行うわけではない。戦争機械はノマドが発明したものであり、その第一の目標はノマドの平滑空間の拡大にすぎない⁵⁸。つまり戦争は戦争機械の「第二の、代補的、或いは総合的目標」にすぎない。戦争機械は国家装置によって所有されるに至るが、その時になって初めて戦争は、戦争機械の第一の目標となる⁵⁹。資本主義によって、戦争は、限定された戦争から総力戦争〔guerre totale〕へと変わる。戦争機械と国家装置との関係も一変する⁶⁰。「所有化が反転してしまったというか、或いはむしろ、諸国家が、壮大な戦争機械を解き放つことを、再構成することを目指すと言えよう。ここでは国家はもはや、その壮大な戦争機械の単なる諸部分—〔相互に〕対立することもある、或いは〔単に〕併置されている—、にすぎない⁶¹」。世界的戦争機械が生まれて、今度は国家の

ほうがその部分になる。まず、第二次世界大戦期のファシズムという形象を、続いて、戦後の「〈恐怖〉の或いは〈サバイバル〉の平和」の戦争機械という形象を、取ることになる⁶²。

一方で、権力の網の目から漏れ出る流れを構成しているのも、戦争機械である。上述したように、戦争機械は、科学、宗教など様々なものに姿を変えた。近代国民国家において必然的に誕生するマイノリティも戦争機械に他ならない。「資本主義が脱コード化されかつ脱領土化された流れの「接合」を行う時には必ず、それらの流れはより遠くへと行き、流れを言わばモデル—流れを再領土化する—に接合する公理系を逃れ、また、「連結〔connexion〕」の中に入ることを目指す。これらの「連結」は新しい「大地〔土地〕」を描き、戦争機械を構成していて、この戦争機械の目的〔but〕はもはや、絶滅のための戦争でも一般化された恐怖の平和でもなく、革命的運動である（流れの連結、数えられない集合の合成、マイノリティへの万人の生成）⁶³」。国家装置との関係において様々な変貌を遂げる戦争機械はこのように両義的である。

ドゥルーズとガタリによれば、歴史は、生成の共存の諸契機への翻訳でしかない。また、歴史は、政治或いは権力に還元されている。歴史には目的がないだけではなく、権力を免れる私的領域もない。『千のプラトール』の「歴史」哲学にはこの二重の意味でのペシミズムがある。しかしながら戦争機械は常に、脱コード化された、脱領土化された流れをつくりだしている。権力と流れは相補的である。権力は完全に流れを統御することはできない。水漏れは必ずどこかで起こっている。『千のプラトール』にはこのようなささやかな生成が定義より予見不可能なものである以上、一層そうである—意味でのオプティミズムもある。ところで、西洋の歴史を現前の形而上学という閉域によって規定したデリダとの違いは一つには以上の点にある。脱構築するまでもない⁶⁴。権力は確かにあるが、生成も常にある。

哲学から「歴史」哲学へ

私という主体は、人、文章を書くこと、等の形相（形式）によって述語付けることができる。また、目の前の客体も、猫、寝ること、等の形相によって述語付けることができる。主体、客体、形相という概念を使っているという自覚をもたない人が圧倒的多数かもしれない。しかしこれらの概念を前提にせずにものを考える人はいるだろうか。ドゥルーズの哲学は、内在と超越という対概念からなっている（ただしこれは資本主義の内在性と国家装置の超越性とは異なる。資本主義と国家装置はいずれもドゥ

ルーズ哲学の構図でいう超越の側に位置する)。主体、客体、形相は、超越の側に属する。哲学者なら、主体、客体、形相という概念を熟知しているはずであるが、大部分の哲学者は超越の次元だけで事足りると考えている。しかしながらドゥルーズはそう考えない。それどころか、内在のほうが超越に権利的に先行していると考えている。権利的に先行するとは、時間的に先行するということではない。ドゥルーズが公にした最後のテキスト「内在：一つの生…」はドゥルーズ哲学のエッセンスを簡潔に示している。「内在平面」は、「超越論的領野」、「一つの生」とも形容されているが、それ自体においてあるものであり、他の何もの一主体であれ客体であれ一にも帰属していない⁶⁵。逆に、内在平面から、主体と客体という超越的なものは生じている⁶⁶。つまり「超越は常に内在の産物である⁶⁷」。そして内在平面は「潜在性、出来事、特異性からつくられている⁶⁸」。潜在性、出来事、特異性は、外延を同じくしている(或るものが、潜在性であったら、それは同時に出来事、特異性でもある)。またそれらは、生成でもある⁶⁹。内在の産物である超越には、主体と客体とに加えて形相がある⁷⁰。主体、客体、形相は現働的なものである。

ドゥルーズの哲学は著作ごとに変化しているが、その構図は一貫している。「内在：一つの生…」はそれをよく示している⁷¹。つまり、『千のプラトー』の哲学も、上でまとめた点に関して違いはない。存立平面(合成平面、内在平面、一義性平面)と、組織と展開の平面とがあり、前者は内在に、後者は超越に、対応している⁷²。存立平面は、アジャンスマン、生成からできている⁷³。組織と展開の平面は、主体、客体、形相からできている⁷⁴。

アジャンスマンはこのように、内在に、存立平面に属する。つまり、原始社会、国家装置、戦争機械、資本主義は、内在に、存立平面に属する。これらのアジャンスマンの共存が可能であったのは、内在の側にあったからである。しかし事はそれほど簡単ではない。一方で、国家装置と資本主義は、地層に、つまり、組織と展開の平面に、属している⁷⁵。そして、勝義での存立平面に属するのは、戦争機械だけである⁷⁶。戦争機械は両義的で変幻自在に姿を変えるものであった。それゆえどちらもアジャンスマンでありながら、「戦争の「機械」は、国家装置がそうであるようもはるかに、抽象機械に近い(だから「機械」と呼ばれている)⁷⁷」。抽象機械は、具体的なものとしてのアジャンスマンに対して、抽象的なものである。尤も、ドゥルーズとガタリが強調するように、抽象機械はプラトンのようなアイデアとは異なる⁷⁸。通俗的なプラトニズムが考えるアイデアはむしろ、組織と展開の平面の、形相のほうであ

る。重要なのは、抽象機械が、具体的なアジャンスマンのあり方に相関的であるということだ⁷⁹。『千のプラトール』では、一方の、アジャンスマンを支配する抽象機械と、他方の、生成などがある場としての存立平面との関係がまだ整理されていない状態で提示されているが、『哲学とは何か』になると、前者と後者とは同一視されるに至る⁸⁰。つまり、抽象機械は存立平面に、アジャンスマンは生成に、対応するものとされる。いずれにせよ、『千のプラトール』の抽象機械は三種類に分けられている。(1) 存立性の抽象機械(存立平面)、(2) 地層化の抽象機械(組織と展開の平面)、(3) 超コード化的或いは公理的抽象機械⁸¹。戦争機械は(1)に、国家装置(超コード化)と資本主義(公理系)とは(3)に、相当しているのが分かる。このように、国家装置と資本主義は一方で、アジャンスマンであり、その限りで、存立平面の側にありながら、他方で、それら固有の抽象機械(3)の故に、むしろ、組織と展開の平面の側にある。アジャンスマンはそもそも決して一枚岩ではなかった。或る箇所では地層に属し、別の箇所では地層に属さないとも言われている⁸²。また、アジャンスマンには、領土性と脱領土化という二つの側面がある⁸³。アジャンスマンも抽象機械と地層との間にあって、そこには言わば度合の差異がある。

ドゥルーズの哲学は内在と超越からできていたが、『千のプラトール』の哲学も複雑ながら同じ構図をもっている。存立平面と、組織と展開の平面からできている。その「歴史」哲学は、内在の側にある戦争機械と、超越の側にある国家装置と資本主義、からなる。ドゥルーズの哲学は、「歴史」哲学になり、同時に、歴史は政治に還元された以上、政治哲学にもなる。

このように見てくると、歴史の総体が、国家装置と戦争機械との相関関係に還元されたというよりも、超越と内在とがそれぞれ、国家装置と戦争機械に相当するようにされたと言ったほうがいい。そもそもすべては、超越と内在という対概念から考察されていた。なぜ、超越が国家装置に、内在が戦争機械に、局在化されたか、と問うほうが、ドゥルーズとガタリの哲学の戦略に分け入る上で生産的である。『アンチ・オイディプス』では、内在は精神分裂病に、『千のプラトール』ではノマド、マイノリティなどに、局在化される。マージナルなものへの傾斜は一目瞭然である。ただし地層(我々の有機体)から抜け出るための、ドラッグへの依拠は退けられている⁸⁴。重要なのは、内在としてのスキズ、ノマド、マイノリティは、決してそのままの形で実存しているわけではない点である。「マイノリティは、必ずしも数が少ないことで定義されるものではなく、生成或いは浮動によって、つまり、冗長的なマジョリティを構成する個々の公理からマイノリティを分離する隔たりによって、

定義される⁸⁵」。彼らは生成である。つまり内在の側にある。現実は混交しか示していない。ノマドやマイノリティであるだけでは十分ではなく、同時にノマドやマイノリティに生成することが必要である。

最後に

あらゆる文化を等価なものと見なす文化相対主義者といえども、自然概念を放棄しているわけではない。文化を人間固有のものとする以上、どのように規定するのであれ、人間の自然（本性）を前提にしている（人間の本性なしには人間を他の種と区別することはできない）。ただし自然科学に従えば、人間の本性（自然）さえも、進化によってつまり経験的に、獲得されたものにすぎない。その意味で人間の本性は、他の生物種の本性同様、厳密な意味での本性ではない。宇宙全体の歴史との比較では極めて持続性の短い性質（形相）にすぎない。生物進化論がもつ理論的含意は大きい。宗教的コンテクストでいまだに進化論が論争をもたらししている所以である。しかしながら、厳格なデカルト風機械論者でもない限り、生物固有の次元と人間固有の次元を認めない者はほとんどいない。無機物、有機物、人間（文化）という階層は自明視されている。我々の多くは、このような古典的階層を前提にした言わば自覚なき二元論者（主体と客体）である。一般に、どのような立場であっても、自然と文化という対概念を前提にしないものはほとんどない。科学的一貫性は、生物における進化論を人の下位区分にも適用することを要請するだろうが、文化だけは特別視され、社会進化論への風当たりは強い。文化相対主義は一見、歴史の目的論を免れているかのように見えるが、自然と文化という対概念を前提にする以上、或いは、継起としての歴史を認める以上、歴史の目的論から完全に逃れることはできない。ドゥルーズとガタリの「歴史」哲学が退けようとしているのは、あらゆる種類の歴史の目的論である。この意味で、反歴史の「歴史」哲学とすることができる。歴史に対するノマドロジー或いは地理こそが求められていた⁸⁶。言い換えれば、継起、時間に対する共存、空間である。しかしながらこれは歴史が全く無意味ということではない。「今日でもなお、歴史が指し示しているのは、諸条件—どれほど最近のものであれ—の総体にすぎない。人は、それら諸条件の総体から、生成するために、即ち何らかの新たなものを創造するために、背を向ける⁸⁷」。また、政治或いは権力がすべてを覆っているならば、どのような主体性も形相性も、政治或いは権力から無縁であることはできない⁸⁸。この「歴史」哲学が退けようとしているのは、主体性と形相性とに基づくあらゆる種類の（政

治的、宗教的、倫理的)実践論である。民族或いはネーションのみならず、個人にも人間という類にも立脚することはできない。それらはどのように割り振るのであれ、主体或いは形相に他ならない。ドゥルーズとガタリの言う超越の次元での実現を求める以上、どのような救済も革命もありえない⁸⁹。

内在と超越は、自然と文化の焼き直しではない。自然と文化は、これら両方を貫く主体性を前提とせざるをえないし、また、どのような配分であれ(アプリアリとアポステオリ)、形相性をも前提とせざるをえない。一方、内在と超越は、超越だけが主体性と形相性を持ち、内在は生成だけである。尤も、ルソーの自然がそうであったように、ドゥルーズとガタリにおいて生成(内在)が価値基準になって、自然回帰ならぬ生成回帰が要請されているように見えることも確かだ。超越からの脱出方法に関しては、地層の増殖(再領土化)と、暴力的脱地層化(死と破滅の線)とは退けられて、存立平面構築へ至る慎重な方法が求められている⁹⁰。この意味で、生成へのプロセスに方向性がないわけではない。しかしながら、ドゥルーズとガタリがいくら内在へと至る実践を語ろうと、このような意味での実践は、因果性(目的と手段)が成立するかに見える超越の次元で行われるものにすぎない。常に既に我々は中間に投げ出されているのであって、始まりや終わり(目的)とは無縁である⁹¹。内在のほうが超越に権利的に先行している。偶然を肯定するには一度のサイコロ振りで十分だ。これを本格的に論ずるには、ドゥルーズ哲学の、例えば骰子一擲についての立論を考察すべきであるが、それは本稿の目的を超えることになる⁹²。

二人の「歴史」哲学はドゥルーズの哲学に基づいている。歴史への批判は、ドゥルーズによる通俗的時間観への批判に基づいている。肯定にせよ否定にせよ、この「歴史」哲学への態度決定は、ドゥルーズ哲学への態度決定でなければならない。問われているのは哲学であって、この哲学上で展開される個々の事例や各論ではない。この「歴史」哲学であれドゥルーズ哲学であれ、それに真に向き合うとするなら、哲学全体を問題にすべきである。このようにこの「歴史」哲学を正当に見積もるためには、ドゥルーズ哲学を正当に見積もる必要がある⁹³。ここでは両者の共犯性へのおおよその道筋さえ示すことができていたなら、本稿の最低限の目的は果たせたことになる。

註

- 1 強調引用者。Gilles Deleuze, Félix Guattari, *Mille plateaux* (=MP), Minuit, 1980, p. 363. ドゥンス・スコトゥスに由来する「此性 heccéité」を、ドゥルーズは出来事、生成の意味で使っている (Gilles Deleuze, Claire Parnet, *Dialogues*, Flammarion, 1996, pp. 111. MP, p. 633. 註 73 参照)。「歴史に反して、生成は、過去と未来、の観点から自らを思惟する [se penser] ことはない [思惟されることはない]」。MP, p. 358. なお、引用文中の〈 〉は、それに対応する原典の語が大文字から始まることを示している。() は原典のものをそのまま繰り返している。[] は引用者の介入であり、補足、説明などである。思惟もドゥルーズ哲学の重要な概念で、生成の異名である。後述する。
- 2 「歴史には、マジョリティの歴史しか、或いは、マジョリティとの関係において規定されたマイノリティの歴史しか、ない」。MP, p. 358. 「ノマドが歴史をもたないというのは本当だ。彼らは地理しかもたない。そしてノマドの敗北は実に完璧であったために、歴史は国家の勝利と一体化するしかなかった」。MP, p. 490. なお、遊牧民という訳語ではなく、ノマドとしたのは、定住民との対比で使われている点、概念的に牧畜とは分けられている点を考慮したからである。MP, p. 492.
- 3 MP, p. 34.
- 4 註 1 引用参照。「それ [生成] は、〈歴史〉の中で生まれ、〈歴史〉の中に落ち込むが、〈歴史〉に属するものではない。それは、それ自身において始めも終わりもたず、ただ或る中間 [環境] [milieu] だけをもっている。従ってそれは、歴史的なものというよりは地理的なものである」。Deleuze, Guattari, *Qu'est-ce que la philosophie*, Minuit, 1991, p. 106.
- 5 MP, pp. 141-150, 168, 629-630 etc. 記号の体制は、表現と内容とに分けられるアジャンスマンの、表現のほうにある。
- 6 MP, p. 542.
- 7 MP, pp. 528-532. 魔術師はシニフィアの体制に、法律家はポスト・シニフィアの体制に、それぞれ対応している。
- 8 MP, pp. 573-574.
- 9 MP, pp. 580-582.
- 10 MP, pp. 109-116 et 629-630.
- 11 MP, p. 571.
- 12 「至るところで武器のシステムを構成しているのは、アジャンスマンである。長槍と剣が青銅器時代以来実存したのは、馬 - 人間のアジャンスマンによってにすぎない。このアジャンスマンは、短剣と矛とを引き継ぎ、最初の歩兵の武器であった槌と斧とを失権させる。続いては鎧が、馬 - 人間のアジャンスマンの新しい形象を課し、新しいタイプの槍と新しい武器とをもたらした。とはいえ、この鎧 - 馬 - 人間の集合 [つまりアジャンスマン] は、ノマド的生活の一般的諸条件のなかに取り込まれるか、それとともに後になって封建制の定住的諸条件のなかに取り上げられるか、に応じて変化し、異なる効果を持っている」。強調引用者。MP, p. 496. *Dialogues*, 1996, pp. 125-126.

- 13 「我々は社会的形成体を機械状のプロセスによって規定するのであって、生産様式によって規定するのではない(生産様式はこれらのプロセスに依存している)」。MP, p. 542. MP, pp. 534 et 560.
- 14 第十二命題「捕獲」の節を参照。MP, Proposition XII : Capture, pp. 545-560. 特に MP, pp. 548-549 et 555.
- 15 MP, p. 529.
- 16 命題 13「国家とその形式」の節参照。MP, Proposition XIII, pp. 560-575.
- 17 命題 14「公理系と現状」の節参照。MP, Proposition XIV, pp. 575-591.
- 18 至るところで進化論は批判される。例えば以下参照。MP, pp. 147, 149 et 534-538. また、進化は生成とは異なる。MP, pp. 291-292.
- 19 「新石器時代の国家、或いは旧石器時代の国家でさえ、一度出現したら、狩猟民-採集民の周辺世界に反作用すると言うだけでは十分ではない。国家は既に出現する前から、これらの原始社会がその社会の存続のために祓いのける現働的な[actuel] 限界として、或いは、これらの社会が収束していくが、自らを滅ぼすことなしには到達できないところの点として、作用している。これらの社会の中には、国家の方に向かうベクトルと、国家を祓いのけるメカニズムとが同時に存在し、接近するにしたがって押し返され外部に置かれる収束点が存在している」。MP, p. 537. MP, p. 542.
- 20 「ところで、これらのプロセス[五つの社会的形成体のこと]はまさに、社会的トポロジーの対象となる共存の諸変数であるから、これらに対応する様々な社会形成体は共存している。そしてこれらの共存の仕方には、内的なものと外的なものがある」。MP, p. 542. 「そして(2) [国家の第二の形式、つまり、進化した帝国など]から(3) [国家の第三の形式、つまり、近代国民国家]の間にも相関関係が[国家の第一の形式と第二の形式との間の内的相関関係に]勝るとも劣らず存在する。というのも、産業革命が存在するとは言え、局所的な結合[conjonction]と脱コード化された流れの大々的な接合[conjugaison]との間の差異は微々たるもので、資本主義は、歴史のすべての十字路で発生、消滅、再生を繰り返してきたように見えるほどであるからだ」。MP, p. 574.
- 21 「全世界的国際組織は反対に、共存する様々なレベルを仲介する中間を構成している。だからこうした組織は、単に商業或いは経済にかかわるものではなく、宗教的なもの、芸術的なものなどでもある。この意味で、国家、都市、砂漠、戦争機械、原始社会といった異なる社会形成体を同時に通過しうるものはすべて、国際的組織と呼ばれる。歴史上の大きな商業的形成体は、単に極としての都市だけではなく、原始的、帝國的、ノマド的切片をもっている—そうした切片をこの商業的形成体は通過することによって、時として別の形式をとることさえあった—」。MP, p. 543. これは正しくは資本主義と原始社会との共存を示す引用ではないが、記述した一般的言明の補足となろう。
- 22 二つの極は以下参照。MP, pp. 531-532. 国家の三つの形式は以下参照。MP, pp. 574-575. 三つの二極性は以下参照。MP, pp. 568-570 et 580-582. 共存の議論はされていないが、一般的言明より明らかである。
- 23 MP, p. 537.
- 24 近代国民国家は以下参照。MP, pp. 564-570 et 580-582.
- 25 「このアジャンスマンが、「メガマシーン」、捕獲装置、或いは古代帝国、である。このアジャンス

マンは三つの様態のもとで機能し、三つの様態はストックの三つの側面に対応している。つまり、地代、利益、税である。そしてこれら三つの様態は、このアジャンスマンでは超コード化(シニフィアン)という審級において、収束し一致している。すべてを超越した土地の所有者であるとともに、大工事の事業主、税と価格との支配者、でもある専制君主。これは、権力の三つの資本化、或いは「資本」の三つの分節、でもある」。MP, p. 555. MP, p. 558.

- 26 政治と権力は概念的に近い。ともかくも、両者とも国家、資本主義のみならず、未開社会、戦争機械にも関わりとされている。「この二重の系列に従って、戦争機械における権力は定義されている。権力は、切片にも中心にも、様々な中心の間のありうる共鳴にも様々な切片の超コード化にも、もはや依存していない。権力は、〈数〉に内的である諸関係一量から独立的である一に依存している」。MP, 488.「原始社会には権力の形成体がないわけではない。それどころかたくさんの権力の形成体をもってさえている」。MP, p. 540.「要するにすべては政治である。ただしあらゆる政治はマクロ政治であると同時にミクロ政治である」。強調著者。MP, p. 260. 政治と権力は第9プラトール「1933年——ミクロ政治と切片性」に詳しい。

27 MP, pp. 446-448.

28 MP, p. 450.

29 MP, pp. 454-455.

30 MP, p. 455.

31 MP, p. 469.

32 引用者強調。MP, pp. 464-465.

33 MP, p. 467.

- 34 MP, pp. 469-470. 二重の生成とは、人種=部族と平滑空間=環境、への生成である。国家装置に共犯的な思惟のイメージを押し付ける哲学者としては、デカルト、カント、ヘーゲルの名が挙げられている。社会学者では、デュルケムとその弟子、現代の精神分析も言及されている。一方で、反思惟の側では、ニーチェ、キルケゴール、シェストフの名を読むことができる。国家の側のリヴィエールと生成の側のアルトールとの、ドゥルーズが好んで行う対比もなされている。ここでも生成の側のクライストの名が繰り返されている。MP, pp. 465-469.

35 MP, p. 473-474.

36 MP, p. 474-475.

37 MP, p. 475.

38 MP, pp. 474-477.

39 MP, pp. 532-533 et 570-571.

40 MP, pp. 560-563.

41 MP, pp. 554-555.

- 42 「ここに出現するのは国家のもう一つの極[国家の第二の形式のこと]である。それを簡略に定義

することができよう。公共的圏域はもはや所有の客観的本性を定義するものではなく、むしろ私的なものとなった所有化に対する共同の手段となる。ここで我々は近代世界を構成している公私の混合状態に移行している。絆は人格的なものとなる。依存の人格的關係は、所有者間のもの(契約)であると同時に、所有物と所有者との間のもの(協定)であり、この關係が、共同体的かつ機械的關係を裏打ちする、或いはそれに交代する。奴隸制度さえも、コミュニケーションの公共的な裁量をもはや規定していない。奴隸制度は、個々の労働者に対して行使される私的所有権を規定している。権利全体が、変質をこうむり、主体的、結合的、「局所的〔topique〕」なものになる。国家装置が直面する任務は、もはや既存のコードを超コード化することではなく、脱コード化された流れそのものの結合を組織することになった。記号の体制はこんなふうに変化した。あらゆる点で、帝國的なシニアイアンによる操作は、主体化のプロセスにとって代わられる。機械狀の隷属は社会的な服従の体制によって交代されるようになる」。MP, p. 563.

- 43 「機械狀隷属と社会的服従を二つの概念として我々は区別している。[1] 隷属があるのは、人間自らが一つの機械の構成要素である時である。この場合の機械とは、上位の統一性による管理と指揮の下で、人間が、人間同士で或いは他のもの(獣、道具)と共に、合成している機械、のことである。[2] 服従があるのは、上位の統一性が人間を主体として構成している時である。この場合の主体とは、外的なものとなった対象—この対象が、動物であろうと道具であろうと機械であろうと—に関わる主体、である。この時もや人間は機械の構成物ではなく、労働者、使用者となる。この時人間は、[帝国] 機械によって利用されるのではなく、[技術] 機械に服従している。こう言っても第二の体制の方がより人間的であるというのではない」。MP, pp. 570-571.

44 註 34 参照。以下も参照。Qu'est-ce que la philosophie, pp. 47-48.

45 MP, p. 571.

- 46 国家装置の超越性と資本主義の内在性は、後で取り上げるドゥルーズ哲学での超越と内在とは対応していない。特に、資本主義の内在性は、ドゥルーズが特権化する生成(或いは出来事)としての内在性と同じではない。この点は後でも指摘する。『アンチ・オイディプス』では資本主義の内在性を主張しつつ、それが超越の側にあることが述べられていなかった。この点で曖昧であった。例えば Deleuze, Guattari, *L'Anti-Édipe*, Minuit, 1972, p. 311.

- 47 MP, pp. 570-573. 「公理系そのものは、国家がその実現モデルとなっているが、技術的なものとなった新たな形式の下で、機械狀隷属システムを再建或いは発明している。公理系の内在性の中にあつて、形相的な「統一性」という超越性の下にはない以上、これは決して帝国機械への回帰ではない。しかし、これは人間がその構成部品となるような機械の再発明であり、この機械では、人間はもはやこの機械に服従した、労働者と使用者、ではなくなっている。動力機械は技術機械の第二世代を構成したが、サイバネティクスと情報科学、の機械は、技術機械の第三世代を形成し、これによって、一般化された隷属の体制が再構成されている」。MP, p. 572.

- 48 権力と流れとの關係の詳細なメカニズムは、第9プラトール「1933年——ミクロ政治と切片性」も参

照。例えば、*MP*, pp. 264-271 et 275-277.

- 49 「国家或いは捕獲装置、とともに始まるものは、原始的諸記号系〔sémiotique〕を超コード化する一般
的記号学〔sémiologie〕である」。 *MP*, p. 555. 「1) 範列的帝國的古代国家。これらの古代国家は、隷属
機械一既にコード化された流れを超コード化する一を構成している」。 *MP*, p. 573. *MP*, pp. 560 et 566.
- 50 *MP*, p. 555. 註 25 参照。
- 51 *L'Anti-Œdipe*, p. 230.
- 52 *MP*, p. 560. 「重要なのは、どのような仕方によってであれ、超コード化装置は、脱コード化された
流れ一貨幣の、労働の、所有の、…流れ一を発生させることである。これらの脱コード化された
流れは、超コード化装置の相関物である」。 *MP*, p. 561.
- 53 註 42 参照。 進化した帝国は、脱コード化された流れを超コード化するよりは、むしろそのまま
結合することを許す。つまり、公共的圏域に回収することなく、私的領域での結合を認める。た
だしこの結合は、局所的なもの或いは規定されているもの、にすぎず、資本主義には至らない。「国
家装置〔進化した帝国〕は新しい任務に直面している。その新しい任務とは、既存のコードを超コー
ド化することよりは、脱コード化された流れのそれとしての〔そのままの〕結合を組織することに
ある」。 *MP*, p. 563. *MP*, p. 564.
- 54 「我々が「公理系」という言葉を単なるメタファーとして使用しないなら、公理系をコード・超コー
ド化・再コード化のジャンル全体から区別するものを想起しなければならない。公理系は、純粹
に機能的な要素と関係とを直接的に考察していて、それらの本性は特定されないまま、多様な分
野で同時に無媒介的に実現されている。これに対してコードは、これらの分野に相関的であり、
かつ、規定された〔qualifié〕要素間の特定の関係を言表している。そしてこれらの要素は、超越的
そして間接的にしか、至高の形式的統一性(超コード化)に還元されえない」。 *MP*, p. 567.
- 55 「2) 相互に非常に多様な国家一進化した帝国、ポリス〔cités〕、封建性システム、君主制など一。
これらの国家は、むしろ主体化と服従とによって作用し、そして、脱コード化された流れの、局
所的な或いは規定された、諸結合を構成している。3) 近代の国民国家。脱コード化を「国家の第
一・第二の形式よりも」はるかに遠くにまで進め、流れに対する、公理系の或いは一般的な接合の、
実現モデルとして存在する」。 *MP*, pp. 573-574. *MP*, p. 565.
- 56 *L'Anti-Œdipe*, p. 266.
- 57 *MP*, Axiome I, p. 434. そして、「国家自身は常に外との関係において存在してきたのであり、国家は
この関係から独立して考えることができない」。 *MP*, p. 445.
- 58 「しかしより一般的に言って、既に論じたように、戦争機械はノマドの発明したものだった。なぜ
なら戦争機械は、自らの本質において、平滑空間の、この空間の占拠の、この空間での移動の、
そして、人間の「平滑空間」に対応する編成の、構成要素であったからである。このことこそ戦争
機械の唯一の真の積極的目標(ノモス)である。即ち、砂漠、草原を増大させることであって、そ
こに人が住めなくすることではまったくない」。 *MP*, p. 519.

- 59 「1」戦争機械はノマドの発明であり、それは、戦争を、第一の目標〔objet〕とするのではなく、第二の、代補的、或いは総合的目標〔objectif〕とする。それは〔第二の目標であるのは〕、自らが衝突する国家形式と都市形式とを破壊すべく規定されているという意味において、である。〔中略〕3) しかし、まさに戦争機械がこうして国家に所有される時、戦争機械は戦争を、直接的かつ第一の目標とする、「分析的」な目標とする、傾向をもつ（そして戦争は戦闘を目標にする傾向をもつ）。MP, pp. 520-521.
- 60 MP, pp. 524-525.
- 61 MP, p. 525.
- 62 「国家からいわば「〔一旦入った後〕出てくる」この世界的戦争機械は、継起する二つの形象を示している。最初は、戦争を、自分自身の運動以外の目的をもたない無制限の運動にするファシズムの形象である。しかしファシズムは第二の形象の兆しにすぎない。ポスト・ファシズムの形象は、平和—〈恐怖〉の、或いは〈サバイバル〉の平和としての平和—を直接的に目標とする戦争機械の形象である」。MP, p. 525.
- 63 MP, p. 590. 「しかしながら、こうした〈国家〉的或いは〈世界〉的戦争機械の諸条件、即ち固定資本（資源と物資）と人的可変資本、こそが、予想外の反撃の、意想外な発意の、可能性をたえず再創造していて、これらの可能性は、変異的、マイノリティ的、民衆的、革命的、諸機械を決定している」。MP, p. 526.
- 64 図式化を恐れずに言えば、デリダの提示する差延と閉域はそれぞれ、ドゥルーズの言う内在と超越とに対応している（これを説得的にするには多くの注釈が必要である）。更に、差延と閉域との関係、内在と超越との関係を、カントの言う物自体と現象との関係になぞらえることができるなら（これにはもっと注釈が必要になる）、こう言うことができる。デリダは専ら現象（閉域）に身をおくのに対して、ドゥルーズは物自体（内在）の方に身をおいている。もっと言えばドゥルーズは、物自体と現象（超越）との間を自由に行き来している。これは、デリダが物自体（差延）を、常に現象の側から、つまり専ら否定的に、考えているのに対して、ドゥルーズは物自体（内在）をあつさり記述していることに対応しているであろう。また、この違いは、デリダがフッサール哲学から発想するのに対して、ドゥルーズがカント以前の実体の哲学（スピノザ、ライプニッツ）から発想していることに由来するであろう。
- 65 「絶対的内在はそれ自体においてある。つまりそれは、何かの中にあるのではないし、何かに帰属してあるのではない。それは、客体に依存しているのではないし、主体に所属しているのではない」。強調ドゥルーズ。Deleuze, « L'Immanence: une vie … », in *Deux régimes de fous*, Minuit, 2003, p. 360.
- 66 「主体と客体は、〔本来〕内在平面から落下するものであるが、それら主体と客体が、普遍的主体或いは任意の客体として捉えられ、内在そのものが、主体或いは客体に帰属させられるとしたら、それは、超越論的なものの変性そのもの—この変性とは（例えばカントにおいてそうであったように）もはや経験的なものを二重にしているにすぎない—に他ならず、また、内在の変形—この内在の変形したものはこの場合、超越的なものの中に含まれている—なのである」。Idem.
- 67 « L'Immanence: une vie … », p. 363.

68 *Idem.*

69 このテキストでは生成は自明的な仕方では潜在性等に結び付けられているわけではない。生成は以下で現れる。「L'Immanence: une vie... », p. 359. これら四つの概念の共外延性は例えば以下参照。「個々の出来事の中に、常に同時的で異質な合成要素が数多く存在している。なぜならそれら合成要素はそれぞれが一つの合間 [entre-temps] であり、しかもそれらすべてが、不可識別ゾーン、決定不可能ゾーンを通じて、それらを連絡させあう合間そのものの中に存在しているからである。それらは、変奏であり、変化付け [modulation] であり、インテルメッツォであり、或る新たな無限な秩序の特異性である。出来事の合成要素はみな、一つの瞬間の中で、そして、出来事そのものは、それらの瞬間の間で過ぎ去る時間の中で、現働化或いは実現化されている。しかし、合成要素としてのいくつかの合間しか、そして合成された生成としての出来事しか、もたない潜在性の中では、何も起こらない」。強調著者。 *Qu'est-ce que la philosophie*, p. 149.

70 「超越論的領野の内在性を規定している潜在性 [潜在的なもの] と、それら潜在的なものを現働化し、かつそれ [ママ] を超越的な何かに変容している可能的な形相との間には、大きな差異がある」。「L'Immanence: une vie... », p. 363.

71 ドゥルーズ哲学については例えば以下参照。吉澤保、「ドゥルーズにおける出来事 —— ホワイトヘッドとともに ——」『津田塾大学紀要』No.43、2011年3月、303-328頁。「ドゥルーズの個体化——ライブニッツを中心に——」、東京大学仏語仏文学研究会、『仏語仏文学研究』第45号、2012年8月1日、107-127頁。「ドゥルーズにおける個体化 —— ホワイトヘッドとの関連で ——」、東京大学仏語仏文学研究会、『仏語仏文学研究』第37号、2008年11月15日、109-122頁。「ドゥルーズにおける個体化 —— 『差異と反復』から『意味の論理学』へ ——」、東京大学仏語仏文学研究会、『仏語仏文学研究』第38号、2009年4月15日、59-78頁。西洋哲学は形相（プラトンのアイデア）と質料という対概念によって根本的に規定されている。この構図の言わば脱構築を目指す『差異と反復』は、形相と質料という対に変えて、理念と強度という対を提示する。理念は、通常の形相、つまり抽象（一般、普遍）とは異なるものであり、同様に強度も単なる素材としての質料ではない。『差異と反復』では、理念と強度、即ち個体化、が内在に相当する。表象が超越に相当する。内在は権利的に超越に先行している。『差異と反復』では、両者の相互作用によって個体化が起きるとはいえ、理念と強度とが独立していた。『意味の論理学』では、理念が強度に依存するかのような構図に変わる（唯物論化）。また、強度が強度を入れ子式に無限に含むということはなくなり、器官なき身体という言葉が底が認められる。更に、理念は超越論的領野という表面上で生起することになる。いずれにせよ、強度と理念（動的発生）が内在に相当し、静的発生、端的には実現が超越に相当する。『差異と反復』、『意味の論理学』に関しても、内在と超越からなる構図に関して違いはない。

72 「存立の或いは合成の平面（平面態 [planomène]）は、組織と展開の平面に対立している。組織と展開とは、形相と実体とに関わっている。つまり形相の展開と、実体の或いは主体の形成とに関わっている。しかし存立平面は実体も形相も知らない。（此性）は、この [存立] 平面に登録されているが、まさ

- に個体化の様式であって、形相にも主体にもよらず進行している」。MP, p. 632. MP, pp. 326 et 330.
- 73 「存立平面に登録されているのは以下のものである。[1] 此性、つまり出来事、それ自体として把握された非身体的変形。[2] ノマド的なつまり曖昧な—しかし厳密な—本質。[3] 強度の連続体、つまり連続変化 [variations continues]—これらは定数と変数を超えている。[4] 生成—項も主体ももたないが、ただしそのどちらをも、隣接の或いは非決定性のゾーンに導いている—。[5] 平滑空間—条理空間を通じて合成されている—」。MP, p. 633.
- 74 MP, pp. 326, 330 et 632.
- 75 「我々にとっての三つの大きな地層を、即ち我々を最も直接的に縛る地層を、考えてみよう。それは、有機体、意味性、主体化である」。MP, p. 192. 意味性はシニフィアンの体制、主体化はポスト・シニフィアンの体制である。MP, pp. 167 et 435. 註 32 参照。「国家は地層化によって作動している」。MP, pp. 539-540. 「むしろ我々はここに再び、存立平面が、資本の、組織的または発展の、平面と対立しているのを、或いは官僚ダイアグラム社会主義的平面と対立しているのを、見出す」。MP, p. 590.
- 76 「戦争機械は、その外部性形式のゆえに、自ら変身することによってしか実存しえない。戦争機械はまた、産業上の革新において、技術上の発明において、商業上の販路において、宗教上の創造において、[つまり] 国家によって副次的にしか所有化されるがままにならないこうしたすべての、流れと動向とにおいて、も実存している。外部性と内部性、変身する戦争機械と自己同一的国家装置、徒党と王国、メガマシーンと帝国、を考えなければならないのは、独立の観点からではなく、共存と競合との観点から、相互作用の絶えざる領野において、である。同じ一つの領野が、自らの内部性を国家に画定し、その一方で、自らの外部性を、国家から逃れ去る或いは国家に抗して立ち上がるものに記述している」。強調著者。MP, p. 446.
- 77 MP, p. 639.
- 78 MP, p. 636.
- 79 「抽象機械は、具体的なアジャンスマンにおいて作動している。抽象機械は、アジャンスマンの第四の側面、つまり脱コード化と脱領土化との先端、によって定義されている。抽象機械は、これらの先端を描き出している。[中略] 抽象機械は、[1] 形相化されていない質料と、[2] 形相的でない機能とからなる。各々の抽象機械は、[1] 質料—[2] 機能の、強化された集合 ([1] 系統流 [phylum] 及び [2] ダイアグラム) である」。MP, pp. 636-637. 抽象機械は、質料或いは実体、の極と、形相の極とからなると考えられているだろう。
- 80 「概念 [生成のこと] はそれぞれ、一つの機械の様々な布置としての具体的アジャンスマンである。他方、平面 [内在平面のこと] は、それらのアジャンスマンが部品になっている抽象機械である。諸概念はそれぞれが出来事である」。Qu'est-ce que la philosophie, p. 39.
- 81 MP, pp. 640-641.
- 82 MP, p. 629.
- 83 MP, pp. 629-630.

84 *MP*, pp. 201-204, 345-351, 633-634, 636, 639-640.

85 *MP*, p. 586.「しかし、生成或いはプロセス、としての「マイナー性 [minoritaire]」と、集合或いは状態、としての「マイノリティ」とを、混同してはならない。ユダヤ人、ジプシーなどは、或る条件の下でマイノリティを形成しうる。それだけでは生成を産み出すのにまだ十分ではない。状態としてのマイノリティ上で人は自らを再領土化し、或いは、再領土化されるにまかせる。しかし生成において人は自らを脱領土化する。〈黒人〉でさえ黒人に生成する必要があると、ブラックパンサーの活動家は言った。女性でさえ女性に生成する必要がある。ユダヤ人でさえユダヤ人に生成する必要がある(確かに一つの状態は十分ではない)」。 *MP*, pp. 476-477.「要するに、[1] ノマディズムと [2] 移動生活 [itinérance] と [3] 季節移動生活 [transhumance] との間にどんなに事実上の混交があろうとも、基本的概念はこれらの三者において同じではない ([1] 平滑空間、[2] 物質の流れ、[3] 回転)。ところで、ただ[このように] 区別された概念から出発することによってのみ、混交が起きている場合の混交について、混交が起きる形式について、混交が起きる秩序について、判断することができる」。 *MP*, p. 510. *MP*, p. 356-357. 実際の遊牧民はドゥルーズとガタリが特権化するノマドそのものではない。実際の知覚は純粹知覚と純粹記憶との混交にすぎないとベルクソンは考えたが、ドゥルーズはこのベルクソンの考えを一般化し至るところで応用している(例えば、Henri Bergson, *Matière et Mémoire*, in *Œuvres*, PUF, 1959, pp. 214-215. *MP*, pp. 140, 149, 182, 223 etc.)。これについての認識なしにはドゥルーズ哲学の理解はありえない。

86 註3参照。

87 *Qu'est-ce que la philosophie*, p. 92.

88 すべてを政治に還元する立場がそれ自体で正当化されているわけではない。ドゥルーズとガタリの場合、この立場は哲学的に基礎づけられている。二人の哲学を理解することなく、表面的に政治還元主義だけを受容するのはファッションの受容と変わらない。

89 尤も、超越の次元での闘争が全面的に退けられているわけではない。「公理系の次元での闘争」の重要性を述べている箇所もある。*MP*, pp. 579-580 et 588.

90 註84参照。『千のプラトー』には、脱領土化、逃走線を始め、実践に関わる概念が頻出している。どのプラトーも、実践へ向けて構築されているように見える。この著作は実践哲学を提示しようとしている。この実践の中身について更に深く論ずるには、この著作の一層の読解が不可欠である(「絶対的脱領土化」を論ずる箇所は必須だろう。*MP*, pp. 635-636.)。

91 ここで問題になっているのは、言葉のあらゆる意味における目的論である。当然、自然界における生物学的な意味での合目的性(種とその個体、個体とその器官など)も、主体と客体との間の合目的性も、含まれる。カント批判哲学は、主体と客体との調和(合目的性)から、客体の主体への必然的従属へとコペルニクスの革命を果たしたとされるが、ドゥルーズによれば、この批判哲学は合目的性を隠微な仕方でも再導入しているにすぎない(Deleuze, *La Philosophie critique de Kant*, PUF, 1963, p.98.)。当然批判哲学だけではなく、合理主義哲学も経験論も合目的性を免れることは

できない (*Ibid.*, p.22.)。

92 Deleuze, *Différence et répétition*, PUF, 1968, pp. 255-258 ; *Logique du sens*, Minuit, 1969, pp. 74-82.

93 ドゥルーズ哲学については註71の論考参照。